広島大学大学院教育学研究科紀要　第一部　第51号　2002　83－89

書写技能の運用能力育成に関する実践的研究

―技能運用への意識化に向けた取り組みを中心に―

松本　仁志・谷口　邦彦[1]

(2002年9月30日受理)

Practical research on training of capability which employs calligraphy skill

Hitoshi Matsumoto and Kunihiko Taniguchi

The final purpose of the calligraphy study in an elementary school and a junior high school is employing calligraphy skill in everyday life efficiently. This purpose is not fully achieved yet, although it has not changed from the Meiji era to today.

Although it is the factor that there are also few school hours of calligraphy, it is thought that the first factor is in the contents of a lesson unrelated to everyday life. A lesson unrelated to everyday life is a lesson which used only brushes. In everyday life, we are using the pen and only the limited scene uses a brush. Therefore, the study which used the brush is a means for raising the calligraphy skill of a pen to the last, and has not only targeted to raise calligraphy skill with a brush.

As for the lesson style to which a brush and a pen are related, the result is expected. However, the efforts do not bear fruit easily. Then, I want to propose raising the capability to employ calligraphy skill in everyday life as one method of solving this problem. The capability to employ the calligraphy skill of a pen is searched for understanding the purpose of the scene which writes a character.

Key words: Capability to employ, Calligraphy skill, Relation of a brush and a pen
キーワード：運用能力，書写技能，毛筆と硬筆の関連

1．書写技能の運用能力とは

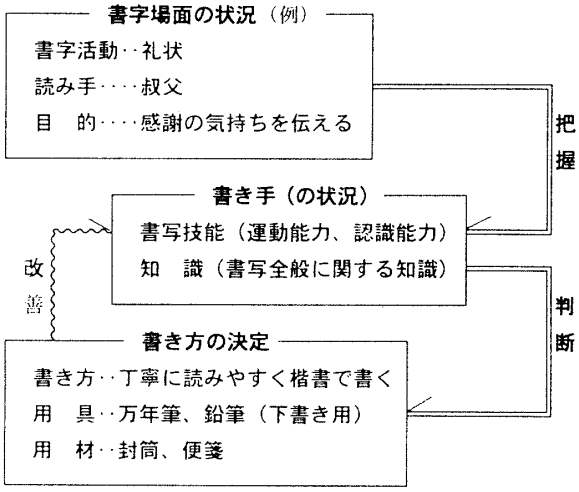
書写技能の運用能力とは，国語科書写の授業を通して習得した諸技能を，文字を書く諸場面の様々な状況に応じて使いこなす能力のことである。各書字場面の目的，書こうとする内容の社会的価値，読み手の立場等々，様々なの情報を理解・把握した上で，用具・用材，使用書体，書きぶりなどを判断して書いていくという総合的かつ実践的な能力と言えよう。この能力は，書写に関わる知識や技能内容に対する理解，また，十分な練習に裏打ちされた書写技能を土台とするが，そこに，各書字場面の状況を踏まえて適切な書き方を選択・決定するといった〈判断力〉が加わって成り立つ能力である。(→図①)

書写技能の運用能力は，日常の書字場面において常に求められているいわば当然の能力である。例えば，私的なメモの書き方と，採点者（読み手）を意識しなければならないテストの答案の書き方とは，同じではない。しかし，事実として，場面・状況に応じた書き分けができない子どもは少なからず存在するのであって，運用能力を当然の能力として済ませてしまうことのできない現状がある。このことは，書き分けたくてもできないという技能到達レベルの問題であるだけではなく，状況に応じた書き分けの必要性を認識していないという意識レベルの問題であることが多い。

本稿では，その意識化を阻む書写の授業上の問題点

[1]広島大学附属中・高等学校

を明確にし，また，運用能力育成のための書写授業の考え方を整理した上で，広島大学附属中学校における授業実践から，運用能力育成上の今後の実践的課題を導き出していく。



図①

2．日常から遊離した書写授業の問題点と歴史的経緯

戦後，経験主義学習への批判から主流になった書写の系統学習は，単なる技能主義・毛筆大字主義の方向に向かってしまった。毛筆大字主義は半紙への清書で終わる授業スタイルを固定し，さらに展覧会主義と呼応して長期に及んだ。それがいつしか固定観念的に教育現場に浸透してしまい，日常化という意識が弱体化したと考えられる。確かに，戦後の新しい系統学習のもとで，それまで曖昧だった書写の学習内容は科学的・体系的に整理されてはきた。しかし，肝心の授業が毛筆大字の説明と練習と清書という日常化へ向けた学習の入り口部分の活動に終始してしまい，硬筆による日常化へむけた意図的な応用学習活動が組織・実践されてこなかったのである。

ようやく昭和50年代後半に至って，「硬筆・毛筆関連学習」という日常化へ向けた学習スタイルが提案されたが，毛筆による書写技能を硬筆による書写技能に応用すれば自ずと日常化が図れると考えるにとどまったために，結局，今日まで日常化の徹底ということには至っていないと考えられる。

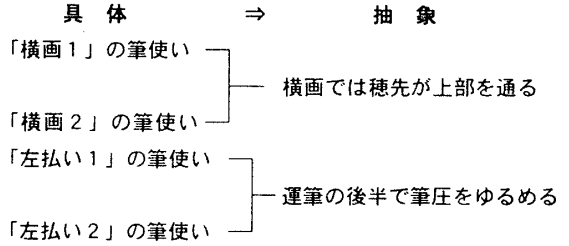
書写技能を日常において運用する能力の育成を今改めてクローズアップするのは，日常化の徹底を図るという意味を持つのである。

3．書写技能の運用能力育成における書写技能の系統的学習の果たす役割

(1) 技能内容理解の抽象化の過程と運用能力

書写技能の技能内容についてここで改めて述べる紙面的余裕はないが，運用能力との関係を考えていく上で必要な点を整理しておきたい。

書写の技能内容は，図②のような具体から抽象の流れの中で理解が図られる[1]。書写技能を運用する場合に，同一（類似）構造を持つ多数の字種への応用が求められるのであるから，書写の技能内容を抽象化の流れの中で理解しておくことが，その大前提となるのである。

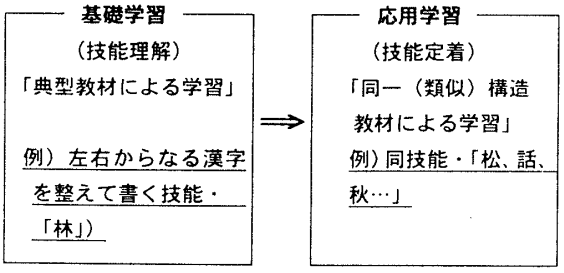


＊筆使いの場合

図②

(2) 書写の授業構造と運用能力

教科書に所収されているような典型教材（いわゆる手本）によって進める基礎学習との関係から言えば，同一（類似）の構造を持つ教材によって進める応用学習は，書写技能の概念への認識を抽象化しながら定着を図る学習として不可欠な学習活動である。すなわち応用学習は，具体レベルの技能相互の比較の結果成り立つ学習活動であり，書写技能に対する認識の抽象化の過程すなわち書写技能を系統的に理解するための道筋にそったものでなくてはならない。



図③

学習者が書写の授業は日常に生かされていくのだという意識を持つことは，書写技能の運用能力育成の前提である。その意識を持たせるためにも，図③のような，基礎学習と応用学習から構成される書写の授業構

造と，技能に対する認識の抽象化の過程とが相関関係にあることへの理解が必要である。

4．技能運用への意識化を図る学習指導の考え方

(1) 意識化を図る学習活動の意義

技能学習がいわゆる自動化の段階に入るにはそれ相応の練習時間が必要となる。しかし，学校教育においてそれだけの時間的保証を求めるには無理があり，書写の授業においては，練習はするものの実質技能内容の理解の段階でとどまっているのが実状である。また，先述したいわゆる毛筆大字主義の弊などから，毛筆から硬筆へ十分に技能的な転化が図られていない現状，すなわち日常筆記具による応用練習が不十分な現状を考えたとき，その練習の部分を日常における書字の実践の中でも意識的に持続させていくことが一つの方策として考えられよう。すなわち，日常の書字活動の中で，授業における技能理解を生かしながら定着を図るという考え方である。

日常への技能運用は，学習者の書写技能レベルが高度に達しっていなければ行えないというわけではない。もちろん，実際の書字場面において，書体や書き方などを選択できるだけの技能的力量と知識の量は前提であるが，先にも述べたように，技能的には未熟であっても日常の書字場面で書きながら練っていくという方向で考えるのが妥当であろう。運用能力の育成の過程において，習得した書写技能を日常で使うということへの意識化を徹底することを重要なねらいの一つとして考えるべきである。

授業の延長線上に日常の書字活動を位置づけさせるためには，まず，理解した技能を日常で運用しようということへの意識化すなわち動機付けの学習活動が必要になる。

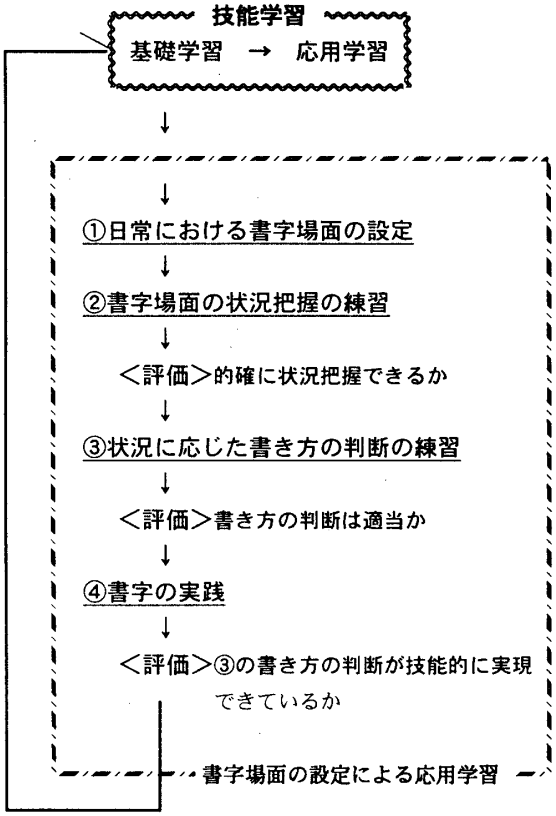
その学習活動をどのように組織するかは，今後実践的に追究していかなければならないが，現段階では，おおよそ次のような考え方が妥当だと考えている。

(2) 書字場面の設定による学習の考え方

① 技能学習と書字場面の設定による学習の関係

書字場面の想定による学習では，まず，日常生活または学校生活における様々な書字場面を具体的に想定することから始まる。

提示された書字活動の種類から，読み手・当該書字活動の目的を把握し，次に自分の技能レベルや知識量から書き方を判断し，さらに決定した書き方で実践するという流れで行う。それぞれの活動を意識化させる



図④

ことが肝要であり，その際，図④のように各活動ごとに評価を加えることがポイントとなろう。そして，最終的に，総合的な評価を加え，その結果不十分な点は，技能学習へフィードバックすることもできるように，全体をサイクル構造として把握しておくことも必要である[2)]。

また，繰り返しになるが，書写技能の運用能力の育成は，技能の系統的学習からの能力的発展という連続性を明確にしながら進めていくべきであり，書字場面の設定による応用学習は，基礎学習と応用学習から構成される書写の授業（技能学習）の構造と，技能認識の抽象化の過程とが密接に関わっていることへの理解を得ることを前提として行われなければ実効性は薄い。そのように考えた場合も，運用能力育成のための書字場面を想定した学習活動と授業単位の技能学習とは，図④のように循環するサイクル構造としてとらえながら連携して進めることが有効だと言えよう。

時間の関係上毎時このような学習を取り入れるのは難しいが，定期的に取り立てて扱う機会を設け，意識化の徹底を図るようにしたい。

② 歴史的経緯

具体的な書字場面を想定した学習は，戦後間もなく広まった経験主義学習の動向に呼応してすでに行われ

ていた[3]。しかしこの後，いわゆる新しい系統学習が主流になっていく過程において，書字場面の設定による応用学習のスタイルは陰を潜めていった。書き分けのための〈判断力〉を，運用能力という概念に吸収した形で把握し，図④のような関係構造の中に位置づけて学習活動を組織していけばよかったのだが，「手紙を書く」「ハガキを書く」といった書式学習，配列・配置の学習の視点に重きが置かれ，一活動として単発的に切り取られてしまった。結果，運用能力の育成を，技能の系統的学習の流れにそった能力的発展という道筋において把握することが不明確になってしまったのである。

(3) 日常の書字活動から技能学習へのフィードバック

このような場面設定による学習を通して，日常化への意識が高まれば，日常で実際に書いたものを評価し，評価の低い技能課題についてはその改善のために技能の基礎学習へフィードバックすることもできるようになる。また，総合的な学習や他教科などにおける書字場面を，より実践的な書写技能の運用能力育成の場として積極的に捉えることも効果的である。必要があれば，それらの学習活動において書いたものを書写的視点から評価の対象とし，図④のサイクルにフィードバックすることも考えられる[2]。

5．技能運用への意識化に向けた取り組み－広島大学附属中学校における実践から－

(1) 限られた時数の書写授業における課題

現在のように授業時間の確保が困難な状況の中で技能運用へ向けた学習を組織するには，より計画的で見通しをもった授業実践が求められる。また，普段の授業にあっても，「何を学習するのか」が学習者が把握できるよう目標を明確に設定しなくてはならない。

書写技能は，繰り返しの練習によって習得されていくものであるが，限られた時間内ではこなせない状況になってきている。宿題を課すなどで補填していくことも考えられるが，基礎技能がいかに定着しているかが問題であり，授業において確実に基礎技能が定着されるよう支援していかなければならない。

さらに，技能の学習と日常化へ向けた書字場面設定の学習の割合についても，年間授業計画を作成する際のポイントになる。図④のように技能学習を繰り返し行いながら，日常における書字場面を設定した応用的な学習を取り入れていくというサイクルは，限られた授業時間で回していく場合に困難さを伴う。

(2) 技能運用へ向けたこれまでの取り組みの反省

① 硬筆・毛筆関連学習の反省

先にも述べたが，技能を中心とする基礎学習から応用学習においては，毛筆で確認した基礎事項（筆使い・字形・配列配置）を，硬筆へと転化させていく学習が行われるのが通常である。

ここで問題なのは，何を転化させていくかであり，授業における焦点化は不可欠である。いたずらに高度な毛筆技能を取り上げるのではなく，生徒の実態に応じて，全員がクリアできるような技能を厳選すべきである。技能運用へ向けた取り組みにおいて，基礎技能の学習が確実に定着していなければ効果は上がらない。また，硬筆から毛筆へという一つのパターンを繰り返してしまうと，単調な授業になってしまうことは言うまでもない。毛筆→小筆→硬筆，あるいは，硬筆→毛筆→硬筆とパターンは状況によって様々に考えられるわけであり，押さえたい学習事項にふさわしいパターンを選択していくべきである。

② 書字場面設定による応用学習における反省

a．速書練習における反省

例えば，授業中にノートを取る，電話のメモといった速書きが必要な場面を想定し，速書練習を行うことは効果がある。また，毎時間一定の時間を決め，だんだん速く書いていくようなトレーニングも効果がある。その際，速書きを拒否する生徒が必ず存在することは無視できない。また，速書き競争に陥ることもあり，日常でどの程度のスピードが要求されるのかを勘案した上で，行っていかなければならない。

b．縦書きと横書きの割合の問題

日常では，横書きでの機会が増え，生徒は縦書きの必要性を感じなくなってきている。縦書きと横書きの練習について，それぞれどの程度に設定すべきかは，今後の課題である。

③ 日常での運用へ向けた意識化における反省

a．行書学習を生かすことについて

書きやすく，そこそこ読みやすい行書を使うことは，日常での運用におけるポイントである。生徒は，「書きやすく，草書よりは読みやすい」行書の特徴については良く理解しており，メモを取ったりノートを取る場面での有効性は認識できている。

しかし，実際の速書きの場面で使えるかとなると，かなりの習熟が必要であり，技能レベルの差が出てしまうところである。そのために行書の必要性を実感できず，楷書で事足りると考える生徒に対する指導が課題である。

b．読み手を意識して書いているか

場面設定の際に，読み手を意識できないことが多い

という実態がある。自分が読むのか，相手がどんな人なのかによって，書きぶりや読みやすさは少しずつ違っていいはずである。場面設定の学習をより効果的に行うためにも，技能学習の段階から，読み手を意識し「読みやすさ」を常に確認していく必要があろう。これは，上記ａの行書学習における課題でもある。

ｃ．筆記用具の使い分けについて

現在の中学生のほとんどは，シャープペンシルを使っている。鉛筆はテストの時に使うか使わないかであり，様々な色ペンは持っていても，黒のボールペンは筆箱にないことが多い。つまり，大抵の場面をシャープペンシルで凌いでおり，筆記用具の使い分けはあまりできていない。

④　日常での実践へ向けての課題

(1)で述べたとおり，時間的な制約のある現在では，応用発展的な学習を十分取り入れていける余裕がない。反面，習得した技能がどう生かされていくかを確認する場は不可欠である。書写授業のみならず，他教科の授業や学校生活全般，さらに，家庭においても進んで生かしていけるような働きかけが必要であろう。

現在行われている総合的な学習の時間においても，書写技能を生かせる場面は考えられよう。その際，どのような技能がどのように生かされていくべきかを，生徒とともに確認しておくことも大切である。

そのために，技能運用に向けた意識化は，運用能力育成のために不可欠であり，その前提となる重要な学習として位置付けていかなければならない。

(3)　技能運用への意識化に向けた実践例

「ふさわしい書き方・筆記用具の使い分けを考えよう」

１．実施時期　2002年6月

２．対　　象　広島大学附属中学校　第２学年
120名（男子60名，女子60名）

３．取り組みのねらい

例えば，中学校２年生の生徒に多く見られるのは，次のような書きぶりである。

ア．シャープペンシルが万能の筆記用具になっている
イ．常にゆっくり丁寧に書いてしまう
ウ．すべて流行の書き方で書いてしまう[4)]

このような生徒は，状況把握ができない，あるいは，書き方の判断が的確にできない，などの理由が考えられる。技能の練習によって改善されていく要素もあるが，読み手を意識した状況判断の部分では，自分が置かれている状況，読み手の状況，さらに，礼儀に関する微妙な状況まで含まれており，生徒一人一人の認識に関わってくる面が強い。中には反抗期を迎えた生徒もおり，生徒それぞれの意識や考え方には隔たりが大きい。

そこで，日常での運用へ向け，文字の書かれる場面のパターンが網羅されるようにし，状況を客観的に把握していけるような授業を設定した。文字を書くそれぞれの場面について，ふさわしい筆記用具と書きぶりについて考え，ポイントを教師が押さえていく。学習の流れは次のとおりである。１時間の予定であったが，活発な意見が交わされ，結局２時間の授業になった。また，適宜４人グループでの話し合いの時間を取った。

第一次　文字を書く場面をあげる
（学校生活・家庭生活・大人になったらこんな場面がある）
第二次　ふさわしい筆記用具をあてはめる
第三次　ふさわしい書きぶりをあてはめる
（楷書・行書・流行の書き方）
第四次　教師がポイントを押さえる

４．授業の実際

①　ふさわしい筆記用具をあてはめる場面

文字を書く場面を20例程あげ，それぞれの場面にふさわしい筆記用具をあてはめていった。「年賀状を書く」「学割の申請書を書く」の２つの場面について，シャープペンシルを使ってもよいと思っている生徒は，次のとおりであった。（人数/120名）

場　　面	男子	女子
年賀状を書く	３０	１６
学割の申請書を書く	３７	２９

図１．シャープペンシルを使ってよいと思う

シャープペンシルでよいと答えた生徒の数は予想以上であり，このことからも，生徒にとってシャープペンシルは万能の筆記用具になっていることがうかがえる。

②　書きぶりをあてはめる場面

ここでは，「楷書・行書・流行の書き方」という分け方をしているが，書きぶりは書体の違いのみならず，目的や内容，読み手の違いや，制限時間などによって変わるものである。

実際の作業場面では，楷書は「ゆっくり丁寧に書くための」，行書は「速く書くための」という認識で生徒はあてはめていったようである。

「先生への書き置き」については，楷書で丁寧に書く場合もあるわけで，そう判断した生徒が多数いた。また，行書には速く書く以外に，大人びた「美しさ」が表現できることに気づいた生徒も見られた。

なお，普段「流行の書き方」で書いている生徒は，

場　　面	男子	女子
電話のメモを取る	29	36
先生への書き置き	15	17

図2．行書を使う方がよいと思う

女子5名程である。先生への書き置きを流行の書き方でよいとする生徒は，使っていない生徒の中にもかなり存在していた。

③　教師がポイントを押さえる場面

今回は，時間の関係で，教師が上記ア～ウの生徒を意識しながら，いくつかのポイントを押さえてまとめとした。

T：楷書では画数が決まっていますが，画数が変わって困る場面をあげてみなさい。
S：画数が変わって困るのは，漢字テストの時です。
T：そうですね。それ以外の場面はどうだろう。掲示物などで画数が違っていたら情報が伝わらないかな。
S：そんなことはないと思う。
T：だから，漢字テスト以外の場面ではすべて，書きやすく，そこそこ読みやすい行書を使えばいいということになるね。
T：鉛筆やシャープペンシルのいいところは，簡単に消せるところですが，消して書き換えられると困る場面をあげてみなさい。
S：「学割の申請」とか，部活で遅くなる時の「残留届け」などです。
T：事務手続き関係の書類は書き換えられると困るね。
T：普段あまり使われない，万年筆や筆ペンが使われるのはなぜかな。
S：キメる必要があるから。
T：儀式などフォーマルな場面では，書きぶりとともに，どんな筆記用具を使うかも大切なんだね。
T：「ハヤリ系」文字は，女子高生が連帯の証として使い始めた，いわばプライベートな場面で使われる書き方です。ここでプライベートな関係の人について考えてみよう。後輩はプライベートな関係の人かな。
S：ビミョーです。
T：「部活勧誘のポスター」は，「ハヤリ系」文字で書いていいと思うかい。
S：いいと思います。
S：いくら後輩といっても，知らない人だって見るわけだから，流行の書き方ではおかしいと思う。
T：先生とはプラーベートな関係かな。提出物や「書き置き」などは流行の書き方でもいいだろうか。
S：…。

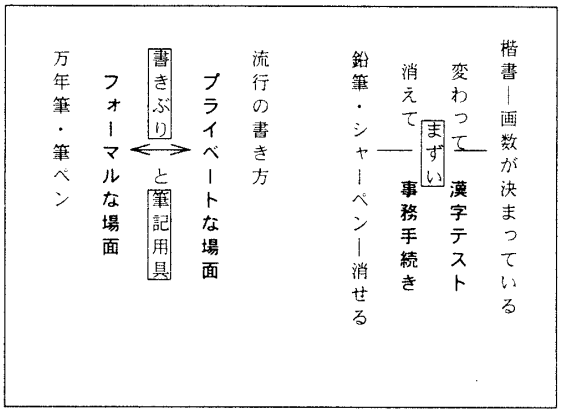


図3．板書

⑷　技能運用へ向けた意識化は図れたか

こうした意識化へ向けた取り組みによって，生徒の意識はどう変わったのか。授業後に書いた感想から見てみたい。（2年C組　男子20名，女子20名）

①　行書を使うことについて

A．私は，流行の書き方と，行書・楷書の区別はつけた方がよいと思うが，行書と楷書の区別はつけなくても良いと思う。（女子）

Aは熱心に授業に取り組み，行書は水準以上に使える生徒である。にもかかわらず，行書は必要ないと答えているのは，楷書でも十分速く書けることを実感しているからであろう。「行書＝速く書ける」ことを実感させられるような工夫が求められる。

②　筆記用具を使い分けることについて

「面倒である」と答えた男子2名以外は，全員が筆記用具の使い分けは必要と書いており，今回成果のあった部分である。

B．色々な筆記用具が出てきたのは，昔の人が「こういう筆記用具が必要」ということで発明してきたものである。だから，個々の特徴を生かして使い分けていくべきである。（男子）
C．私は今までシャーペンを多く使ってきました。でも改まった場面では，どの筆記用具を使うかを考えないと失礼にあたるわけだから，礼儀をわきまえて使い分けたい。（女子）

③ 目的を判断したり，読み手を意識することについて

読み手を意識して書くことは，状況把握には不可欠である。生徒は，「目上の人」に対して特に，書きぶりや筆記用具を使い分けていかなければならないと書いており，この点はほぼ全員が一致した意見を述べている。

> D．使い分けて使わないということは，相手ときちんと接することができないと思われてしまうからです。（男子）
> E．目上の人などには尊敬の意をこめて，同年代とは違う書き方の方が望ましい。文字には尊敬を形に表すことができると思うから。（女子）
> F．何かを書く時は個性も出るので，自分に合った筆記用具を選ぶのも大切だと思う。（女子）

Fの生徒のように，「使い分け＝個性」という意見も少数ながら見られた。読み手を意識していないかのように思えるが，読み手の存在があってはじめて「個性」が発揮できるということなのだろう。また，Gの生徒のように，時代や社会の状況に応じて，使い分けは変わっていくのだとする意見もあった。

> G．普段なら楷書でも行書でもいいと思うのですが，年賀状や場合によってそれらの書き方もいるのではいかと思います。また，書き方に伴って筆記用具も変化していくと思います。（男子）

⑸ 技能運用へ向けての実践的課題

① どの段階においても運用へ向けての意識化を図る

今回は，これまでの取り組みの反省として「使い分け」を考える授業を特別に設定したが，本来は，技能学習の段階から日常での実践へという一連のサイクルの中のどの段階においても，意識化が図れていることが望ましい。技能学習にあっても，必ず運用へ向けての応用・発展学習を仕組むなど，短時間でこなせるような教材を工夫する必要もあろう。現時点において，これ以上行書学習の時間を削減すると，習熟は望めない状況であり，技能学習の時間はできるだけ確保していきたい。

② 技能面の習熟を図る

技能面で習熟すれば，書き分けは容易に行えるようになるはずである。行書の学習については，必要最低限の項目に絞り，速書きの練習を早くから取り入れていくべきである。行書を書くポイントとしては，「点画の連続」と「点画の変化」のいくつかの項目に慣れ，ある程度のスピードで書けるようになった後に，「省略」や「筆順の変化」を加えていけばいいのではなかろうか。年間授業計画の見直しが必要である。

③ 生徒の実態の把握

目標を絞った効率的な授業を展開していくためにも，生徒の実態を把握しておく必要がある。一つのサイクルを終了したした時点で，定点観測的に把握していくことも必要だろう。教師が把握するのみならず，学習者による自己評価や相互評価，ポートフォリオ評価を組み合わせるなどで，学習者自身にも自己の技能レベルを客観的に把握できるようにしていかなければ，運用への成果は上がらない。

④ 学習の繰り返しと継続

本実践の最後に生徒が書いた感想は，100字詰の原稿用紙であった。ほとんどの生徒は，これまでにも増して読みやすい文字で書いていた。しかし，時間が経つにつれて，こうした意識は薄れていくものである。技能の運用は，系統性に裏付けされたサイクルの「繰り返し」と「継続」によってはじめて学習者の日常に生きていくものであろう。

6．書写技能の日常化に関わる他の問題

運用能力の育成というのは，日常化のための一方策であるが，書写技能の日常化という目標についてさらに問題となる点について最後に触れておきたい。

それは，手書きの機会の減少である。コンピュータ全盛の情報化時代を迎え，日常筆記の場面が減少していく動向も呼応して，書写学習の意義さえも問われつつある今日である。今後，書写技能の日常化を図ることに意味があるのかという根本的な問題である。書写学習の意義については，情報化時代における手書きの価値観がある程度落ち着くまでは揺れるであろうが，書写学習の理念の部分について今後緊急に検討していく必要がある。

【注】

1）松本仁志「書写の学習指導方法と認識活動との関係」全国大学書写書道教育学会誌　第11号　1997　pp.47-56
2）松本仁志「書写教育の構造と総合的な学習」全国大学書写書道教育学会誌 第14号 2000　pp.116-124
3）上條信山『書道単元学習と評価法』世界社　1951
4）女子高校生を中心とする少女の文字が注目を集めたのは80年代の「丸文字」から。ここ５年程は，横浜の女子高校生が書いた「ハヤリ系」と呼ばれる書き方が一部で流行している。